

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

来年度から須崎工業高校と合併して新しい学校になる須崎高校。商業科目を履修する生徒を中心に結成された「かわうそガールズ」が課外で取り組む多彩な地域活性化活動は、地域の大人たちも巻き込んで大きなうねりを生み出しています。



卒業生の育てる魚を世界に! 海外や大都市でも活動する 空飛ぶカンパチプロジェクト

第18回 須崎高校 (高知・県立)

取材・文／江森真矢子

をプレゼンテーションしたのだ。

地元民はよく食べるカンパチだが、須崎の特産としての知名度は低い。養殖場で水揚げした魚の脊椎を抜き、すぐに箱詰めして国内外に出荷することで新鮮なまま各地に届ける仕組みを作ったのは、須崎高校の昨年の卒業生。ガールズはカンパチを通して須崎の魅力も伝えようという「空飛ぶカンパチプラン」に取り組んでいる。

クラウドファンด์資金で 東京でのPR活動を実行

取材を行ったのは東京から帰った翌日だった。「私たちが伝えた漁師さんの思いや魚のおいしさ、これまでの活動を、泣きながら聞いてくれた人がいたんです。びっくりしたし、こっちが感動しました。クラファン達成して東京に行けて本当によかった」とひとりが口火を切ると「最初はぜんぜんお金が集まらなくて。自分たちもSNSで発信してたんですけど、このままじゃまずい、って商店街を歩いて募金活動をしたり、スーパーでチラシを撒かせてもらったり。新聞やテレビで紹介

してもらってから一気に伸びたよね」「最後はLINEでここまでできた！ってスクショが飛び交ってヤバかった」。彼女たちはクラウドファンディングで150万円を調達し、東京にカンパチの販路開拓に行ったのだ。

かわうそガールズは、須崎高校商業部の多岐にわたる活動(図1)において、各種コンテストなどで地域の魅力を外に発信するときに使われるユニット名。かわうそは二ホンカワウソ目撃情報のある須崎市のPRキャラクター！しんじょう君のモチーフでもある。

カンパチだけではなく 地域と関わる多彩な活動

商業部顧問の大原信男先生が須崎高校に赴任したのは13年度。当時は総合学科で商業コースがあり、商業部もあったがほぼ休眠状態。翌年から、この部を活用して生徒が社会と関わるさまざまな活動を始めた。

まずは先生が市役所や地域のキーマンの元に足を運んで関係を作り、何か高校生ができることはないかとヒヤリングを重ねた。すると、須崎市元気創造課の職員から元古民家のコミ

ュニティスペースの存在を教えられ、カフェができないかと意気投合。市長自ら衛生管理者の資格を取り条件が整ったことで、月に1度の高校生による「まちかどカフェ」がスタートした。今年6月に3周年を迎えたカフェは、メニューの開発、食材の仕入れ、店舗の飾りつけ、人員手配、会計などすべて生徒が行っている。

活動のひとつ、まちあるきガイドは生徒自身が町を歩き、魅力を発見し、見学場所に交渉をしてプランを作り上げたものだ。1000円の参加費を頂き、ろうけつ染めや漁船乗船などの体験をしてもらい、お土産を渡す。最初のガイドは、大人のボランティアガイドに教えてもらったセリフを覚えてそのまま話すようなものだったが、今ではまちの魅力を自分たちの言葉で語れるようになった。

コンテストはきつかけ 挑戦は応募で終わらない

商業部の活動の特徴に、民家や町並みの写真コンテストである「民家の甲子園」、「観光甲子園」、「商い甲子園」、「ビジネスプランコンテストなど

2018年10月8日。須崎高校の

かわうそガールズ8人が東京・神田のレストランで須崎産のカンパチをお披露目した。安全性にこだわった食

School Data

1946年創立/普通科/生徒数256人(男子107人、女子149人)/進路状況(2017年度)大学短大24人、専門学校27人、就職13人



大原信男先生(商業科長)と生徒のみなさん

■ 生徒の活動の様子



(写真上)空飛ぶカンパチプランに向けて養殖場で調査。(写真中)なんども練習して挑んだ、東京のレストランでのプレゼンの様子。(写真下左)3年目になったまちかどカフェ。制服とは違うユニフォームで接客することで体験に緊張感をもたらす。(写真下右)「民家の甲子園」に向けてまちを探検。醤油づくりの蔵を見せてもらった。

各種大会に参加することがある。空飛ぶカンパチプランもきっかけになったのは、物流会社が主催し、社員がメンターになってビジネスプランを企画提案するコンテストだった。身近な海や漁業をテーマにと調査する中で、売り上げ減や後継者不足という漁師さんたちの悩みを聞き、船上で箱詰めして出荷し午後には東京に届けるというプランを提案した。賞はとれなかったが、提案を聞いた審査員から「物流は担うことができるけれど、その先の販路はどうするの?」と問われたことが東京でのPR活動へとつながった。

ものが中心になっている。部の体制も模擬会社PAC(Power for activating local community)の各部門に代表を置き、生徒が中心になって動かすようになった(図1)。

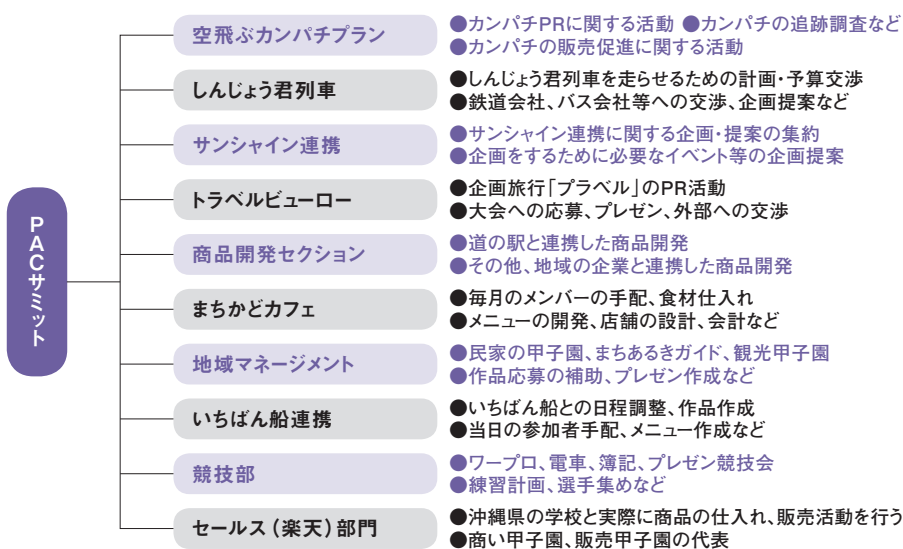
空飛ぶカンパチプランの代表である川口さんは、しんじょう君の絵のラッピング列車を走らせようと鉄道会社と交渉したが果たせなかった先輩に「悔しかったけど挑戦することは大事だよ」と言われて「入部した。かわうそガールズが挑戦で得たのは一度胸」「大人と接することへの慣れ」「感動」「喜び」「達成感」…。「失敗しても大丈夫な、高校生でしかできない経験」という声もあった。

教師の仕事は 生徒に魔法をかけること

これだけたくさん挑戦を仕掛けてきた大原先生はもちろん多忙だ。しかし、何に興味をもつか、何がきっかけになるかは生徒によって違う。だから、なるべくたくさん機会を用意し、全員に一度はスポットを当てたい。「なんとなく3年間終わった、じゃなく『あの時、良かった』という経験をもって卒業してもらいたい」という気持ちからだ。そして、なるべくたくさん失敗をさせたいのだという。

「これから生き残るのは挑戦できる人。失敗しても大丈夫、挑戦しよう、という気持ち育てたいんです。勉強はひとつの特技であって、人にはいろんな特技がある。そのいいところを見つけて、プラスの言葉をかける。大丈夫、できる、と背中を押す。教師の仕事は生徒に魔法をかけること、夢を

図1 模擬会社 Power for activating local community (PAC) の取り組み



潰すんじゃなくて、夢を見させること。火がつけば生徒は勝手に走り出すんです」。

そんな生徒の姿をたくさん見てきたからこそ、先生自身も生徒と一緒に挑戦を続けていくのだろう。